

平成18年度卒業式 学長式辞

愛媛大学長 小松 正幸

本日ここに平成18年度卒業式を挙げるにあたり、学位記を授与された1,830名の卒業生の皆さんに、心からお祝いを申し上げます。また、本式典にご出席をいただきましたご父兄、ご関係の皆様に対して、お慶びを申し上げますとともに、日ごろからの愛媛大学へのご理解、ご支援に対しまして、この機をお借りし深く感謝申し上げる次第であります。

本日のこの晴れの式典には先ほどご紹介させていただきましたように、各界を代表する多数のご来賓の皆様のご臨席を賜りました。お忙しいなか、ご臨席をいただきました皆々様に厚くお礼を申し上げます。

卒業される皆さんがこの4年間あるいは6年間、さまざまの困難や試練を乗り越えて、今日のこの日を迎えるに至った努力に対し、心から敬意を表し、その努力をたたえるものであります。同時に、苦楽をともにした友人、先輩や後輩、指導教員や職員の暖かい支えがあったことを決して忘れてはなりません。大学で自らが得た知識や技能のみならず、このような人間関係や人々との交流の経験は、これからの人生の糧となるものであります。

さて、皆さんの多くは卒業後、社会に巣立って行く訳ですが、大学卒業は人生の一つの重要な節目であり、新たな社会人としての旅の始まりであります。その節目にあたって、自分のなすべきことは何かを考え、そのための努力・目標をもつこと、このことにぜひ取り組んで欲しいと思います。

その為にも現代という時代の特徴をしっかりと把握することが大切であります。このところとみに、国内のみならず国際的にも大きな事件が続発し、社会の主要な制度が崩壊し始めたと言われる状況であります。あらゆるものがこれまで経験したことがなかったような速度で急激に変化しており、国内でもまた国際社会でも一層流動的で複雑化した「先行き不透明な時代」を迎えております。このような時期には安定したライフサイクルの将来像が描きにくく、この国は、あるいは、世界はどこに行こうとしているのか、とりわけ若い人々の間には社会の先行きや自らの行く末に関して不安が広がっ

ているのではないでしょうか。

多くの識者が指摘しているように、いま、世界は産業社会から知識社会という新しいシステムへの移行期にあり、それに伴って古い体制と新しい制度との確執や軋轢がいたるところで起こっている、いわばそれに伴う混乱の渦中に私たちは置かれているのだ、ということを経験する必要があります。皆さんがこれから就職する職場でも、居住する地域でも、いつでもどこでも、予想外のことが起こることがあるでしょう。しかし、日々起こっている事象を表面的にだけ捉えて一喜一憂するのではなく、個々の現象の本質を知的に把握し、今という時代がどういう大きな変化の過程にあるのか、歴史的にしっかりと理解する視点が必要であります。

皆さんのような若い人たちは、これからの新しい社会をつくる重要な担い手であります。このような社会の中では、常に前向きの姿勢をもち、希望を失わず、楽天的であることが大切です。「楽天的である」ということは、困難な状況に陥っても、いずれは事態が好転するに違いないと自分を元気づけられること、目標を達成するのに必要な意志と能力が自分に備わっていると信じていることです。仕事の上での困難もありましょう。どんな場合でも精神的な安定を失うことがないように、つねに心の鍛錬に努め、さまざまな困難を克服するために努力することが大切であります。

21世紀の新しい社会、知識社会については、まだ全体像は明らかになっていませんが、少なくとも、この社会が実現することに対して、私たちは大いに期待していると思います。なぜなら、知識は人間、個人個人が持つもので、それぞれが違ったものをもつことが一層重要なこととなりますから、個人やそれぞれの個性が本当に大事にされる社会になると期待されるからです。つまり、人間の有用な労働とは本質的に何かという点において、個人個人の知識や知恵、ノウハウの提供がより大きく評価される時代になるのです。

そして、重要なことは、この新時代の知識労働の特色は、個人的な活動に留まるものではなく、組織内での協働活動への展開が重視される点にあります。知識は個人個人の中に埋め込まれているものですが、それは組織の中で他の人々とのプロジェクトやグループの中で話し合い、相互に理解し、協働

することによって、競争力の源泉としての新しい知識の創造がはじめて可能になるからであります。

愛媛大学での学びは、今申し上げたことをすべて含みこんでおります。大学は知識の移転と創造、そしてそれを実践的に活用する場であり、それが研究室やゼミの中で組織的な協働を通してなされているのです。重要なことは、皆さんが習得した知識は固定的な専門知識ばかりではなく、ものごとや現象をどのように見、どう考え、真実をどうやって見いだしてゆくのか、にわかには言葉では表すことのできないもの、すなわち、感性とか知恵、ノウハウと言われるもう一つの知力なのです。皆さんは愛媛大学において、新しい社会に参入するのに必要な能力を習得する十分な経験を経ていることに誇りをもっていただきたいと思えます。

しかし、率直に申し上げまして、皆さんが大学の学修の過程で体得したものはまさにその入り口に過ぎません。これからの長い経験を積み重ねの中で、さらに、生涯を通じた学習のなかで、みずからを磨いてゆくことが期待されます。

皆さんが社会で活躍するこれからの40年の間には、わが国社会のシステムやメカニズムなどが大きく変わって行くことが予想されます。とくに東京一極集中と地方の過疎化の弊害は、わが国の均衡ある発展を阻害する重大な問題となっており、これを是正する方策が取られる必要がありますし、実際それは社会の発展の中で必然的に進行するものと考えられます。地域が活力を取り戻し、自立して行くために皆さんが地域の発展に主体的に関わって行くことがなによりも求められます。そうすることによって、自分が本当に自分らしく生きる途を見つけることができる時代が始まっているのであります。現在のような産業構造、社会システムの転換期にこそ、地域に根ざした気概に満ちた挑戦を是非おこなっていただきたい。

この他にも、もっと広く人類共通の課題、地球温暖化の原因と見なされる炭酸ガスの削減、省エネルギー化や森林資源の保全、安全安心な食糧や水の供給など、抜本的な解決を展望した人類的な課題に真剣に取り組まなければ、私たちの存在自体が危険にさらされることになりかねません。大事なことは、皆さんの学びと研究の中で鍛えてきた知の力は、ご自身の宝であると

共に、なによりも人類共有の財産として活かして行かなければならないということなのです。

「長い航海を続けてきた船は、船体に付着した貝を洗い落とさなければならぬ」という言葉があります。歩み続けてきた後には、これまでを振り返り、自分を見つめ直し、新鮮な空気を吸うために一休みすることも必要です。愛媛大学は皆さんが必要な時に大学に戻り、リフレッシュできる学習環境を整える計画を進めております。愛媛大学はみなさんの共通のふるさともあります。愛媛大学は更に校友会と一緒に、皆さん方卒業生との連絡を密にし、連携を深め、必要な支援策を講じることにいたしております。

皆さんが愛媛大学で培った知の力をいかんなく発揮され、寛容と相互理解をもって他との協働を図り、未来の可能性に果敢に挑戦し、活躍されますことを心から願ひまして、はなむけの言葉と致します。